

スワヒリ語をしゃべる人びと

鈴木英明
日本学術振興会特別研究員

交易言語スワヒリ語

スワヒリ語は東アフリカの港町の商業活動が育んできた言語だ。インド洋のあちこちの言語の語彙が豊富に含まれている。そんなスワヒリ語は、さまざまな人やモノ、情報が混交する世界としてインド洋海域世界をとらえる僕にとって、このうえなく関心を引く存在だ。ただ、そういつてはみるものの、アフリカ大陸の外ではほとんど使われることのない言語なのだろうと、どこかでそう思っていた。

ムカッラーでおじさんに出会う

二〇〇九年の夏のある朝、僕はイエメンのムカッラーの町中を歩いてみた。滋賀県立大学の山根周先生のインド洋港湾調査に参加させてもらっていたのだ。参加者全員で手わけしての悉皆調査の一環で、メモをとりながら担当する区画の建造物をひとつひとつみていく。朝の早いうちだったので、こういう調査をしているといつも気になる人目を気にすることなく調査ははかどった。担当区画を歩き終えたころ、なんとなく視線を感じた。振り



アラビア湾に面したムカッラーの港は天然の良港

返れば、クーファイヤ（通常、男性が頭に巻く布）を肩にかけた恰幅の良いおじさんが後ろからメモを覗きこんでいる。他愛もない挨拶を二、三言い交わすと「どうだ、コーヒーでも飲まないか」とおじさんが誘う。僕は近くの露店のコーヒー屋に案内された。

らは、ザンジバルやモンバサにむかし住んでいた、いまでも住んでいた、出稼ぎでタンザニアの内陸部から来ていたり、早い話がスワヒリ語をしゃべる人たちだったのだ。おじさんたちはなんとなく朝の時間帯にぼつりぼつりとこの空き地に集まってきては話に花を咲かせるのだそうだ。気の向くまま、ときにスワヒリ語、ときにアラビア語で話は続く。

人とともに言語が行き交う

ムカッラーでの出会いと前後して、マダガ



ムカッラーの街角でスワヒリ語に出会う

スカル北西部のヌシ・ベ島やインド北西部のカッチ地方の港町でもスワヒリ語に出くわした。ヌシ・ベ島で僕が訪ねた村について色々調べていくと、そこはかつてこの島最大の交易港であったことがわかった。カッチ地方で出会った老人たちは、ザンジバルやモンバサ、オマーンなどで長年商いをしてきた人たちだ。彼らは気分次第でスワヒリ語を用いてむかしを懐かしんでみたり、ときにはスワヒリ語で秘密の話をしたりする。

インド洋の歴史を勉強していて一番難しい問題のひとつに、当時の人びとがどうやってコミュニケーションを図っていたのかという問題がある。ありふれたことにかぎって人は記録に残さない。そうしたコミュニケーションの道具として「海洋アラビア語」の存在を指摘する研究者もいる。けれども、インド洋各地を歩くうちに、スワヒリ語も案外、広く用いられていたのかもしれないと思うようになった。資料をよく読み返してみると、ザンジバル島に丁子や象牙を求めてやってきた一九世紀の欧米の商人たちがスワヒリ語を習得していたり、この言語が東アフリカの港町を越えて用いられていたことが断片的にわかってきた。

インド洋を行き交う人びとは往々にして多言語話者だ。ある人の頭のなかに幾つもの言語が搭載されていて、そのうちのどれかが別

おじさん、スワヒリ語でしゃべりだす

話を聞いていると、次第に引き込まれていく。僕にとって彼はまさに「ナマ」の資料だった。というのは、おじさんの一家は船乗りの家系で、彼自身も最初はダウ船で、そのあとはタンカーなどで東アフリカに随分と通ったのだという。一時はケニア随一の港町モンバサに居を構えていたらしい。ためしに僕は、「モンバサには何年くらい住んでいたんですか」とスワヒリ語で尋ねてみた。「一五年くらいかな」。おじさんは驚くわけでもなく、僕たちの使用言語は滑らかにアラビア語からスワヒリ語へと移行していった。

そうこうしているうちに、おじさんが時計を気にしだした。そうそう暇ではないらしい。ならば失礼しようかと思っていると、おじさんが隣の友だちの所に行くから来るかと聞いてきた。

隣の友だちはビルの狭間の空き地に腰かけていた。そこに着くまでのあいだ、一生懸命、アラビア語会話の例文を思い起こしていたけれど、それはあまり意味がなかった。彼



僕が訪ねた村はかつてヌシ・ベ島随一の国際港だった

の人の頭のなかの同じ言語と繋がりが合う。そんな言語のひとつにスワヒリ語があったのではないか。そして、ある言語のネットワークがインド洋に生きる人びとを繋ぐのと同時に、別の言語のネットワークもまた海を越える。そんなふうにして考えてみると、インド洋海域世界の多様な交流の根幹にあるコミュニケーションの在り方がよりクリアな輪郭で立ちあらわれてくる。僕はワールドと文献のなかを行ったり来たりしながら、そんなことを考えている。